

【魯迅の描く女性像】

## 少女から母へ——「傷逝——涓生の手記」を読む

鳥谷まゆみ

## 一 曖昧な存在

魯迅（一八八一～一九三六）は、女性の解放に強い関心を寄せた文学者である。新文化運動期に、弟周作人（一八八五～一九六七）が貞操観念について論じて、伝統的女性概念に基づく束縛からの解放を唱えると、魯迅は中国女性の「節烈」を痛烈に批判した（「我之節烈観」、一九一八年）。朱安（一八七八～一九四七）と旧式の結婚をした魯迅は、このことを後悔して生涯夫婦関係を結ばなかったという。のちに、北京女子師範高等学校の元教え子であり、事実上の妻となる許広平（一八九八～一九六八）との間に子をもうけるが、その後も朱安や母親の面倒を見続けた。社会や家庭における女性抑圧の現状に対し、鋭敏な反応を示して深い同情を寄せた魯迅であったが、作品に描いた女性の数はさほど多くない。

では、魯迅小説に登場する女性といえば、読者は誰を思い浮かべるだろうか。呉媽（阿Q正伝）、華大媽（葉）、単四嫂（明天）を想像する読者も多いだろう。魯迅が描く女性は寡婦や主婦が大半を占めている。そうしたなか、女学生風の子君（傷逝）は異色の存在だろう。自分の名を持ち、自らの意思で比較的自由に行動しうる。本エッセイで取り上げるのは、魯迅にして唯一の恋愛小説とされる「傷逝」のこの子君についてである。

「傷逝——涓生の手記」は、恋人子君の亡きあと、知識人青年の涓生が二人の恋愛から同居を経て別離するまでを述懐する話である。副題に「涓生の手記」とあるように、涓生による一人称の独白形式で語られる。作品冒頭には、「もしも私にできるならば、私は私の悔恨と悲哀を、書いてみたい。子君のために、自分のために」とある。自由恋愛の末、若い女性が命を落とす「傷逝」は、一九二〇年代初頭、女性解放思想が中国を席捲し恋愛や結婚、離婚問題が人々の関心事であった当時の風潮と相まって話題を呼んだ。

現代においても、多くの中国近現代文学研究者が「傷逝」を「気になる作品」と評して議論を重ねている。例えば、「傷逝」のモチーフを魯迅や実在する周囲の人々、すなわち朱安や周作人との人間関係に求めて、それに対する魯迅の内心の告白と解釈するもの、同時代の社会的圧迫や涓生の身勝手な行動に対し批判するもの、子君から魯迅の女性観や女性解放の風潮を読み解くものなどがあり、諸説紛々としている。その主たる理由は、既に議論されるように、著者の魯迅が「我」の語りを錯綜させ、描写する対象を取捨選択するという、様々な技巧を用いて創作したこと起因している。それは同時に、「傷逝」が読者の経験や興味に基づく解釈を許容する文学テクストであることを示唆する。筆者の勤務校における授業で、「傷逝」は魯迅小説のなかでも受講生に人気の作品のひ

とつに挙げられる。

筆者もまた「傷逝」が気になる読者のひとりである。より正確には、子君という女性が気になる。作品を読み直す度に新たな発見があるように思うのだ。同様に、受講生たちの自らの経験を踏まえた議論にもそれぞれ相応の根拠や説得力があり、議論はいつも大いに盛り上がる。回想される側の子君について、与えられる情報に限りがある以上、自由な読みも許されるだろう。読者は涓生の叙述を通じてのみ、かすかに子君の存在を知るしかないのである。子君はどのような女性だったのか、父親に連れ戻された後、彼女の身に何が起こったのか、大半の読者がこのような問いを抱えながら、「傷逝」を読み進めるのではないだろうか。本エッセイでは、「涓生の手記」に沿いつつ、子君の姿を浮き上がらせることを試みる。そこには文学者魯迅のメッセージが託されているだろう。

## 二 描かれなかった身体、性愛

まず、「涓生の手記」に沿って子君の風貌について考えてみたい。交際当初の子君は、木綿のたて縞のブラウス、黒のスカートを身にまとい、敷石に当たるとコツコツと鳴る革靴を履くという女学生風の恰好をしていた。「えくぼをうかべた白い丸顔、白いほっそりした腕」<sup>④</sup>の子君は、涓生が男女平等やイプセン、タゴールについて話すと、両目にあどけない好奇の光をたたえて微笑んでうなずく。また、涓生の部屋でシェリーの半身像を見ては、気恥ずかしさからかうつむいてしまうという初々さもある。この涓生の描写から子君への愛情を読み取ることは難しくない。交際から半年、涓生の子君への愛情は尊敬へと変わる。それは、子君が次の宣言をした瞬間のことであった。

「私は私自身のものです、あの人たち、だれも私に干渉する権利はありません」<sup>⑤</sup>

既に「傷逝」の代名詞とも言えるこの宣言は、「三綱五常」や「三従四徳」に象徴される儒教思想が根強く残る当時にあつて、読者の心に響いたに違いない。子君は愛する涓生のためにこのような宣言をしたのだが、涓生はこの宣言に中国女性の輝かしい黎明を見て、友人らと絶交までして同居へと踏み切った。涓生にとつて、恋愛の延長線上にある子君との同居は、新思想の体現でもあったわけだが、なかなか踏み込めずにいるなか、それは子君の勇氣に背中を押される格好で実現する。子君の宣言は、それほど力強いものだった。涓生において子君への愛情はいよいよ高まつていった。

しかし、同居後の子君は、読書をすることもなくなり、ひたすら食事の用意や掃除、家畜の世話に情熱を注ぐようになる。彼女にとつて涓生との同居は、婚姻関係を結ぶことに等しく、それは伝統的觀念に支えられていたと考えられる。これについては後述する。同居後の子君は、日ごとに澁澁として太りはじめる。成熟さを増して丸みを帯びるその身体は、自分たちの意思で成し遂げた同居に対する子君の自信を象徴している。自由恋愛の末の同居こそ、愛する涓生が教えてくれた新思想の体現なのであり、そこに疑う余地はなかったのだろう。子君は涓生にプロポーズの場面を何度も再現させてうっとりするのである。一般に、魯迅小説に登場する女性は、幸福な時には「顔は白くふくよか」に、逆に不幸な時に「眼は落ちくぼんで顔色は青い」などと描写される。現実においても大体そのようだが、当時、役所勤めをする涓生には安定した経済力もあり、そうした彼との結婚は、子君に一層大きな幸福を感じさせたに違いない。

いっぽう、涓生は子君にみる身体変化の理由を特に解すことはなかった。あるいは、敢えて無関心を装っていたのかもしれない。そもそも、涓生は手記のなかで性愛を描いていない。一定の年齢に達した健康な男女であればむしろそれは自然な行為のほうである。二人の愛の軌跡を辿る手記であれば、間接的ないしは比喩的にでも描かれても不思議ではないだろうが、涓生はそれを手記に描かなかった。そこには、涓生の意識が働いていたと考えられよう。

藤井省三氏は、涓生と子君の性愛の存在について、プロポーズでの涓生の「她已經允許我了」ということばを引用して論じている。本エッセイでは竹内好訳を引用して該当箇所を確認する。下線および引用中の原文は筆者による。

自分のことだけでなく、子君の言ったことや、したことについても、そのとき私は、何もはつきり見定めていなかった。彼女がもう私に承諾を与えた（她已經允許我了）、ということがわかったただけだ。そういえば、かすかに覚えているのは、彼女の顔が真っ青になり、それからだんだんに赤く——かつてみたことのない、その後もついてみなかったほどの真っ赤な色に変わったことだ。あどけない眼から、悲しみと喜びの、しかし疑惑を伴った光がほとぼしっていた。そのくせ、つとめて私の視線を避け、そわそわして、いまにも窓を破って飛び出さんばかりだった。だが私は、彼女がもう私に承諾を与えた（她已經允許我了）ことがわかった。彼女が何をしゃべったか、あるいはしゃべらなかつたか、それはわからなかつたが、あ

藤井氏は「她已經允許我了」を「彼女がすでに體を許そうとしている」と訳出して、さらに次のように指摘した。「この「許し」は子君による性

交承諾の婉曲な表現であり、「青白」から「深紅」への彼女の顔色の變化とは、性行爲中のもので考えられよう<sup>⑦</sup>。しかしながら、ここは涓生のプロポーズに対するものと推察される。直前の段落に、「私が涙をうかべて彼女の手をにぎり、片足をひざまずいて……」<sup>⑧</sup>とその場面が描かれているのだ。涓生はこの事をあまり覚えていない様子だが、「しかし彼女の方では、何もかもよく覚えていた。私のしゃべったことを、まるで愛読した本のように、すらすら暗誦してみせた。私のやったことを、まるで私には見えないフィルムが眼の前にあるように、如実に、事こまかに述べてみせた」と続く<sup>⑨</sup>。しかも、子君は「承諾」時のことばを、涓生に繰り返し復誦させたとも記される。果たして、ひとりの若い女性がそのような場面を暗誦して、そのうえ相手にも復誦させるだろうか。子君の顔色の變化についても、首や乳房などの身体描写を含んでおらず顔に限定されている。以上の点からも、子君の「承諾」はプロポーズに対するものと考えられるほうが自然だろう。ここでのそれが性交の意を含蓄することは言うまでもない。いずれも、涓生の求めに応じる格好で子君が「承諾」したことに変わりはない。

では、涓生が手記に性愛を記さなかつたのはなぜだろうか。それは涓生にとって、二人の同居が神聖なものであらねばならなかつたからだろう。涓生において、子君に関する描写とえば、食事作りや掃除といった「骨折り」な家事作業の様子、それに太りはじめてから「いっこうに痩せない」身体が中心である。涓生が憧れ、希求するのは「新生の道」である。「愛」はそれに附随するに過ぎず、人間が生きるためには「新生の道」が必要不可欠だと涓生は考えていた。彼の眼には、子君の丸みを帯びていく身体が探求者としての怠惰の象徴と映ったのかもしれない。そのため、彼の手記において、食欲や性欲などは世俗的に過ぎるとして回避されたのではないだろうか。これによって、涓生は自らの魂の崇高

さを際立たせようとしたと考えられる。

### 三 ロマンティック・ラブとお金の関係

同居を機に子君は、澁淵として常に忙しく家事をこなすようになる。子君にとって涓生との同居は、自分の精神と肉体の帰属先を得たことを意味していた。ふっくらしてきた子君の身体はそのことに對する幸福感も象徴していよう。だが、涓生は家事に心血を注ぐ子君に對して、「そんな苦勞ばかりしてちゃいけない」と忠告して苛立ちを隠さない。涓生にしてみれば、子君はいつまでも「宣言」に象徴されるような勇敢な「新女性」であらねばならず、伝統的社会における人妻のようであつてはならなかった。そこでは、子君の個性や価値基準はほとんど考慮されないことに気づくだろう。二人の恋愛から同居の過程において、優先されたのは涓生という男性であり、こうした考え方は時間の経過とともにより鮮明になってゆく。涓生の理想こそが二人の理想という風に、涓生と子君の同居は言わば不平等なロマンティック・ラブを基礎に成立していた。

ロマンティック・ラブについて、類似する例は古今東西を問わず一定数存在する。例えば、「ピーターパン・シンドローム」、「ピグマリオン・コンプレックス」<sup>⑪</sup>などがそれに近いだろう。ピグマリオン・コンプレックスとは、「自分がつくりあげたものを崇拜するという一種のナルシズムの表象」<sup>⑫</sup>とされ、男性が女性に對し母親など特定の役割を期待したり、女性を人形のように扱うことを嗜好する傾向をいう。女性アイドルの熱狂的ファンの心理もそれに近いかもしれない。中国においては、周作人が士大夫（中国古代の知識人）の女性観を、「順調な時には女性を粘土細工の人形のように弄び、駄目になると家を破壊し、国を滅ぼす狐狸精<sup>こりせい</sup>」と

論じたうえで、女を輕蔑しながらいっぽうでは女を追いかける阿Qをこの士大夫と重ねて批判している<sup>⑬</sup>。涓生もまた、理想の枠組みから子君が逸脱することを許さなかった。

涓生のような男から連想されるのが「人形の家」のヘルメルである。作中にも登場するヘンリック・イプセンの戯曲「人形の家」（一八七九年）は、妻ノラがある日突然覺醒して、自分が夫ヘルメルに人形のように扱われていたことに絶望を覺え、子供を残したまま家を出ていく話である。中国においては、一九一八年六月に胡適らによって『新青年』に翻譯發表されて以降、大いに流行した。知識人青年層を中心にノラは自立した女性の象徴として賛美されたのである。涓生もノラの果斷さを賞賛する話を子君にしており、ここからも影響の一端を見て取れる。

「傷逝」執筆の二年前の冬、魯迅は北京女子高等師範学校で「ノラは家出してからどうなったか」<sup>⑭</sup>と題する講演をしている。ここでは、家出後のノラの辿る運命が墮落か家に歸るかの二つの道しかなかったことが指摘され、女性が経済的権利を獲得する必要性が説かれた。さらに魯迅は次のように付言した。

人生で最も苦しいことは、夢から醒めて、行くべき道がないことではありません。夢を見ている人は幸福です。もし行くべき道が見つからなかったならば、その人を呼び醒まさないでやるのが大切です。……もし道が見つからない場合には、私たちに必要なものは、むしろ夢なのであります。<sup>⑮</sup>

「ノラ」ブームのただなか、女学生たちが周到な準備もせぬまま家を出ることを魯迅は憂慮したのでろう。ノラに待ち受ける厳しい運命を語ることによって、女学生たちの眼を現実へと向けさせようとした。

ところで、魯迅と親交があった許欽文（一八九七―一九八四）の短編小説「理想の伴侶」（一九二三年）にもまた、知識人青年が婚姻や伴侶に幻想を抱く様子が描かれている。伴侶となる女性が「新女子」であることを求める「我」は、具体的な条件として、ダンス、歌、ピアノができること、その前提として美しくあでやかでしとやかなことを挙げている。女性の経済的権利への干渉を許さず、完全に新式かあるいは旧式の女子を求めるなど、その条件は際限がない。翌年、魯迅は同作品に擬して「幸福な家庭」を執筆したが、そこでもやはり物書きの男が女性に事細かな理想を抱いている。両作品の知識人青年に共通するのは、女性に対して教養を求め、極端で自分本位な理想を抱いている点だろう。ほぼ同時期に描かれた「傷逝」の涓生にも同様に、エゴイステイックな一面がうかがえる。

さて、金銭問題は、涓生と子君の關係に修復しがたい深い傷を残す。同居のための部屋をようやく借りると、子君が自分の金の指輪とイヤリングを手放して生活費を工面した。この時、涓生はこれの子君の「新女性」としてのプライドと解釈した。実際に、その宝飾品は実家が子君に与えたものだっただろうし、それを手放すことによつて子君も旧社会との訣別の意思をあらわそうとしたのかもしれない。いずれにせよ、二人にとつてお金が不足していたのは事実である。涓生の解雇によつてますます困窮を極めると、子君は以前のように雑誌も読書もしなくなり、ひたすら家事に没頭するようになる。いっぽう、涓生はあくまでも精神的豊かさを希求するのだが、一向に改善しない現状に苛立ちを覚えて日々を過ごすうち、次第に子君がいなくなることを夢想するようになる。「私は自分一人なら、何も生活には困らぬ。非妥協の性格のため、もともと親戚縁者ともつきあわず、引越してからは一切の旧知とも疎遠になつてゐるが、一端飛躍しさえすれば、生きる道はまだまだ広い」と。金銭問

題は、若い二人の愛情や理想を徹底的に打ち砕いてしまふ。

#### 四 曖昧から明瞭へ

子君は、愛犬阿随を捨てるという涓生の残酷な一面を目の当たりにしてから、寮時代の恋愛話を笑顔で復習し始める。一見穏やかな子君の顔には、「絶えず恐怖の影がかすめていた」という。子君はどうしてそのように怯えていたのだろうか。本節では同時代の女性のなかでも、特に子君と同じ若い世代の女性が置かれていた状況を踏まえながらその理由を考察する。

「傷逝」が書かれた一九二五年前後、一般に、女性は一定の年齢になれば生家を出て他家に嫁ぎ、子孫を産むことが期待された。宗族といった「家」を中心とする旧来の考え方が根強く残る時代である。先述した通り、女学生風の恰好をした子君は、自分の意思で自由に行動しており、生家にも婚家にも属していないようである。近代女子教育の普及によつて、少女たちは女学校という新たな行先を獲得するわけだが、そのことは子君にも当てはまるだろう。

ここで、民国期の女学生について、濱田麻矢氏の「女学生叙事」に関する研究<sup>18)</sup>を参照してみよう。濱田氏は、本田和子氏の日本の女学生に関する研究、『女学生の系譜——彩色される明治』（青土社、一九九〇年）を参照して次のように論じている。

職業には直接結びついていない（働くという進路はあいまいに閉ざされている）高等女学校は、「女学生」を具體的な未來から切り離し、幼女と人妻の間の時間を生きる宙づりの存在にした。その枠組みは民国期の女学生にもほぼ當てはまるだろう。<sup>19)</sup>

さらに、「女学生叙事」のヒロインに共通する特徴として次の四点を挙げる。(一)近代的な教育を受けている。五四以降の新思想の洗礼を受け、それを内在化している女性、(二)成熟した、妊娠可能な身体を持っている、(三)安定したモノガミック(排他的な一対一対応の)な恋愛関係を結んでいない。女学生は「宙づり」にされた存在として意識されている。女学生叙事の女学生は、精神面でも身体面でも安定した帰属先を持っていない、(四)自分の将来は自分で決めるべきものという理想を持っている。新思想を学んだ女学生は、家長の決めた婚姻に逆らい、自分の結婚や職業を自分で決めようと考える。そのうえで濱田氏は、「女学生叙事」を「近代教育を受けてはいるが(受けているがゆえに)、自分の頭脳と身体をどう行使するか決めかねている、極めて危うい少女たちを描くもの」と定義した。

子君はこの「女学生叙事」の特徴に部分的に符合していよう。涓生への愛、新思想への憧れゆえに自ら「宣言」をしたが、涓生との同居によって安定した帰属先を手に入れると、あたかも人妻のように生きようとする。いっぽう、涓生は封建社会からの完全な脱却を望み、子君に勇敢な「新女性」像を重ねながら、自らが理想とする「愛」と「新生の道」を模索するも、子君とではそれが叶い難いことを悟る。子君が本質的には「旧式」の女性であることを見抜いたのである。つまり、子君は、女学生より一層曖昧な時間を生きる、その存在すら危うい女性であったと言えよう。

涓生は、「新しい希望は、二人が別れることにしかない、彼女は断乎として出て行くべきだ」<sup>20</sup>との結論に達して、子君にもう愛していないという「真実」を告げた。その時の子君の表情を涓生は次のように記している。

彼女は、顔がサッと土色になり、死人のようになった。が、たちまちまた生気がよみがえり、あどけないキラキラした光がその眼からほとばしった。その光は、飢え渴えた子どもが母の慈悲をさがし求めるように、四方に向かって注がれた。だが、空中をさがし求めただけで、私の眼をビクビクしながら避けてしまった。<sup>21</sup>

子君の表情は彼女の生と死を象徴していよう。子君にとって、涓生の愛情の有無は自らの運命を左右する重要な意味を持っていた。だが、子君がそのことに気づいていたか定かではない。子君の場合、新思想や知識を授けてくれる涓生への憧れが愛情へと発展したと考えられるが、「宣言」を経て同居を果たしたものの、涓生が求めるような「新女性」を演じ続けるのに十分な能力を持ち合わせていなかった。そのように考えるならば、気づいていなかった可能性も高い。「生」への渴望という人間の本能が、彼女をして涓生のなかに自分への愛情の片鱗を探させたのかもしれない。他方、涓生は、二人の関係に軋みが生じ始めると、わりと早い段階から幾度も彼女の「死」を想像するようになっていた。これは、二人の同居が涓生という権力のもと成立していたことを示唆している。自身が告げる「真実」が子君にとって如何に重要な意味を持つか、恐らく涓生は理解していたはずである。告げるタイミングを慎重に探りながら、最終的に子君に「真実」を告げた。

ここで注意を要するのは、子君が命を落とすという悲劇は、本人の意思決定によって引き起こされたということである。丸尾常喜氏の『魯迅——「人」「鬼」の葛藤』<sup>22</sup>によれば、「傷逝」の時代、「女性是他家に嫁すべき存在であり、生家で死んでもその祖墳に埋められることがない」<sup>23</sup>のであり、彼女らの遺体は葬式らしい葬式もなく無縁の共同墓地などに葬られるのが一般的であった。中国の伝統的な死生観を背景に持つこのよ

うな女性の状況は、寡婦祥林嫂が死後を案じる話にもよく現れている。しかし、恋愛中だった子君がそのような現実を想像しえたかたと言えは疑問である。もしそうならば、恐ろしくて「宣言」などできなかっただろうから。「盲目的な愛情」が少女をかりそめの「新女性」に仕立てたのだろう。吉兆胡同の一室を一步外に出れば、そこには旧態依然たる社会が広がっているのであり、涓生が繰り返し子君に述べていたように、二人が存続するためには日々手を携えて「新生の道」を開拓し続けるしか方法はなかった。それが子君とでは不可能だと悟った涓生は、一方的に子君に別離を切り出すのである。一見するとエゴイスティックにも過ぎる涓生の行為は、祥林嫂が魯鎮の宗教とモラルによって共同体の外に排除されたのと同じ論理だろう。子君と祥林嫂はともに身を滅ぼす運命を辿るが、子君が自らの意思で旧社会を飛び出した点で異なる。そして、再び涓生という権力に回収されてしまうのである。子君の悲劇はここにある。

冬から春に移るころ、子君は突如父親に連れて行かれる。テーブルの上にわずかの食糧と調味料、銅貨数十枚を置いて。二人の生活資源のすべてを子君が自分に残してくれたと涓生は感謝する。のちに、涓生は職を求めて知人の官吏宅を訪問した際、子君が死んだことを聞かされる。この時、涓生は子君に与えた「真実」が彼女に愛なき人々の間で死ぬことと、彼女が歩む道の先には「墓標さえない墓」が待ち受けていることにはつきりと気づくのである。そして、涓生は「新しい生命の道」へ踏み込むべく、自らの悔恨と悲哀を綴り始める。

亡魂なるもの、地獄なるものが、真にあればと私は思う。それがあれば、たとい妖風の怒り狂う中であろうと、私は子君をさがし求め、その面前で私の悔恨と悲哀とを打ちあけて、彼女のゆるしを願

うだろう。さもなくば、地獄の毒火が私を包圍し、私の悔恨と悲哀とを猛烈と焼きつくすだろう。<sup>55</sup>

子君の愛情は、皮肉にもその死によって崇高さを帯び、涓生の人格を陶冶したと言えよう。悔恨、悲哀を描くのに、涓生が手紙ではなく、より公開度が高い手記形式を選択した理由は、自身の判断の正当性を表明したかったからという可能性もある。ただ、どのような執筆動機にかかわらず、涓生が子君との歩みを反芻し、それを記す行為によって、贖罪のみならず、子君が確かに生きた証を彼は胸に刻むことになるのである。

##### 五 おわりに——子君のイメージ

以上、本エッセイでは、「涓生の手記」を読み直すことによって、子君という女性の輪郭を浮かび上がらせることを試みた。その直接の動機は、有志で魯迅小説を読む機会に恵まれて、私が女性像の担当になったことによる。個人的にも以前より気になっていた子君という女性と向き合えたことは幸いだった。この経験は今後授講生との議論を一層盛り上げてくれるだろう。本エッセイでも見てきた通り、「傷逝」には恋愛を背景とする子君の悲劇が描かれている。自我を有し、愛を知ったことよって女性が破滅する話は、現代に生きるわたし達にもリアリティをもって響いてくる。手記のなかで曖昧なまま埋もれてゆく子君を掘り起こす過程は、「傷逝」が持つ今日的意義をジェンダーの視点から見つめ直す作業そのものであった。

「涓生の手記」には、二人の出会いや子君の生家などの細かいディテールは描かれていない。手記形式による独白は、描く対象を取捨選択するのに都合が良く、ナルシストな涓生にとって理に適った文体だと言える。

食事や性愛など世俗的対象の描写を注意深く回避しながら、「愛」や「新生の道」を中心に描写することによって、涓生は自らの魂の崇高さを際立たせようとした。封建的な空気が依然と残る当時であって、子君は不幸にも命を落とすが、涓生の手記に記されることによって、より確かな存在として人々に記憶されるだろう。その意味において「傷逝」は悲劇としてだけでなく、子君という女性の確かな「愛」と「生」を背景とした恋愛小説としても読める。

涓生にもう愛していないという「真実」を知らされた子君。彼女の衝撃たるや想像に難くない。しかし、父親に連れて行かれる際、食糧と銅貨数十枚をテーブルに置いておいた。これを子君における涓生への当てつけとみる議論も確かに存在するが、「彼女は、はじめから終りまで、僕が少しでも長く生活できるようにと希望してくれた」と涓生は記して、子君から母性にも似た無償の愛情を見出している。同居後に丸みを帯び始める子君の身体は、幸福感のみならず、母性も象徴していよう。そして、それは涓生の人格を陶冶した。私が興味を覚えたのもそうした子君にみる「母」のイメージだったのかもしれない。

自らの決定によって結果的に子君は身を滅ぼすが、彼女の魂はそのイメージとともに時を越えて静かに生き続けるだろう。二人の魂が救われる日はいつか訪れるはずである。涓生が手記に悔恨や悲哀を綴る意義は小さくない。「傷逝」は、中国が近代の歩みを加速させるなか、自我を獲得したがゆえに、曖昧な存在として生きた女性の姿を示す文学テクストとしてこれからも読み続けられるだろう。

## 注

① 『魯迅選集』第二卷、一二六頁。

② 日本における先行研究のごく一部を挙げる。丸山昇「『傷逝』札記」(『中

少女から母へ——「傷逝」——涓生の手記」を読む

哲文学会報』第六号、一九八一年)、北岡正子「虚言世界への「イニシエーション」——「傷逝」の物語内容」、『お茶の水大学中国文学会報』第六号、一九八七年)、中井政喜「『傷逝』に関する覚書」(『言語文化論集』第九卷一号、一九八七年)、中里見敬「魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡——獨白と自由間接話法を中心に」(『日本中国學會報』第四六集、一九九四年)、永井英美「魯迅「傷逝」論」(『野草』第六八、第六九号、二〇〇一、二〇〇二年)、湯山トミ子「魯迅「生」と性の軌跡——「長明灯」から「孤独者」、『傷逝』へ」(『成蹊法學』第七九号、二〇一三年)など。新しいものに、谷行博「魯迅と涓生——「傷逝」における陶淵明(二)」(『幻境』創刊號、二〇一八年)がある。いっぽう、中国には膨大な数の先行研究がある。中国学術論文検索サイト「中国知網」にタイトルを入力するだけで一〇六四篇の論文がヒットする。子君に関する最近のものに、孫慈姍「被書写者の命運——從子君形象看「傷逝」对書写行為的反思」『新文學評論』二〇一九年六月)がある。

③ 本エッセイは、二〇一七年三月六日、中国語圏人文学研究会(魯迅再読 魯迅の描く人物像から「近代」を探る)、於立命館大学)にて行った口頭発表をもとに文章化したものである。筆者の拙い発表に対して、代田智明氏、永井英美氏、宇野木洋氏から貴重なご意見を賜った。心より御礼申し上げる。また、本エッセイには、筆者の勤務校での授業内容を含むことを申し添えておく。

④ 『魯迅選集』第二卷、一二六頁。

⑤ 『魯迅選集』第二卷、一二八頁。

⑥ 『魯迅選集』第二卷、一二九・一三〇頁。藤井省三「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死(原題：傷逝)」と森鷗外「舞姫」との比較研究」(『東方学』第百二十五号、二〇一三年)参照。

⑦ 藤井省三「魯迅恋愛小説における空白の意匠——「愛と死(原題：傷逝)」と森鷗外「舞姫」との比較研究」(前掲)、一〇頁。

⑧ 『魯迅選集』第二卷、一二九頁。

⑨ 『魯迅選集』第二卷、一三〇頁。

⑩ 『魯迅選集』第二卷、一三三頁。

⑪ ダン・カイリ著、小此木啓吾訳『ピーターパン・シンドローム——な

ぜ、彼らは大人になれないのか」（祥伝社、一九八四年）、小野俊太郎『ピグマリオン・コンプレックス——プリティ・ウーマンの系譜』（ありな書房、一九九七年）。

- ⑫ 小野俊太郎『ピグマリオン・コンプレックス——プリティ・ウーマンの系譜』（前掲）、一三頁。
- ⑬ 周遐寿「呐喊衍義・五一恋愛的悲劇」（『魯迅小説裏的人物』上海出版公司、一九五四年）七九・八〇頁。
- ⑭ 魯迅「娜拉走后怎樣」北京女子高等師範學校『文藝會刊』第六期、一九二四年初出。のちに『婦女雜誌』（第十卷第八号一九二四年八月）に転載。『魯迅選集』第五卷、所収。
- ⑮ 『魯迅選集』第五卷、一三〇頁。
- ⑯ 『魯迅選集』第二卷、一三八頁。
- ⑰ 『魯迅選集』第二卷、一四〇頁。
- ⑱ 濱田麻矢「女學生だったわたし——張愛玲『同學少年都不賤』における

回想の敘事」（『日本中國學會報』第六四集、二〇一二年）、二八三・二九八頁。

- ⑲ 濱田麻矢「女學生だったわたし——張愛玲『同學少年都不賤』における回想の敘事」（前掲）、二八六・二八七頁。
- ⑳ 『魯迅選集』第二卷、一四二頁。
- ㉑ 『魯迅選集』第二卷、一四三頁。
- ㉒ 丸尾常喜著「魯迅——「人」「鬼」の葛藤」（岩波書店、一九九三年）。
- ㉓ 丸尾常喜著「魯迅——「人」「鬼」の葛藤」（前掲）、二六二頁。
- ㉔ 丸尾常喜著「魯迅——「人」「鬼」の葛藤」（前掲）、二五六頁。
- ㉕ 『魯迅選集』第二卷、一四九頁。
- ㉖ 『魯迅選集』第二卷、一四六頁。

（北九州市立大学准教授）